詩吟神風流機関紙

神風流

第169号
令和６年４月11日

全日本詩吟道連盟理事長
詩吟神風流総元
三代目　岩淵神風

第五十四回新年全国詩吟大会兼全国コンクール決勝大会開催にあたり多くの皆様にご来場いただきまして、誠に有難うございます。

詩吟は日本の伝統芸術でありますが、長い歴史のなかで人々に伝承されてきたものが一つの「型」として成立し、そして音楽的な研究や文学的な研究が重ねられ神風流の「吟調」というものが磨かれてきました。詩の内容に合わせて、実に多彩な節があることからもお分かりいただけるかと思います。詩吟は「継続の上に創造として生み出された」という意味で伝統芸術なのですが、こうした伝統芸術の「担い手」の皆様方がこの大会に集まっておられます。第五十四回の大会を迎えることができますのも、皆様の詩吟への熱意と努力、詩吟の指導をされている先生方のご尽力、大会運営にご協力いただいている皆様のおかげです。有難うございます。

さて、コンクールの採点項目の一つに「詩心の表現」とあります。詩の心を表現することは一朝一夕にはできませんが、「詩の心」を知るというのは日常においても実はとても大事であり、「共感力」という「人の心がわかる」ということに繋がるのではないでしょうか。例えば、今日私が吟詠する藤原定家の和歌「駒とめて」は「大雪の中、見知らぬ土地で夕暮れを迎えてしまった旅人」を思い浮かべます。では、その旅人に対してどのような気持ちになるでしょう。何かしてあげたいという気持ちが呼び起こされます。詩吟を学ぶことで、人の心がわかり、お互いが思いやれる社会に繋がればと思っています。詩吟の普及が社会貢献になればと少しずつではありますが大きな目標を持って努力して参りますので、今後とも宜しくお願い申し上げます。

（新年大会挨拶より）

第54回　新年全国詩吟大会
令和6年2月25日　北区赤羽会館